二次元ぷち文庫
綾守竜樹
表紙／しなの優良
座敷童の掟
～資料 伊奈澤聡美の書簡～
外伝
試し読み版
2D PETIT POCKET NOVELS

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『座敷童の掟 外伝　資料 伊奈澤聡美の書簡』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『座敷童の掟　暴富は艶めく女体を贄に』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

座敷童の掟
～資料 伊奈澤聡美の書簡～
外伝
綾守竜樹
表紙／しなの優良
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

伊奈澤(いなさわ) 聡美(さとみ)

伊奈澤家の令嬢。メイド服をまとい、忍にかしずく美女。

赤沼(あかぬま) エリス

アカナメ族の女性。アメリカかぶれで享楽的な性格。

鈴木(すずき) 蓉子(ようこ)

人間と妖怪の間で生じた揉め事を取りなす、鎮守府審神機構の一等官。

忍(しのぶ)

伊奈澤家に住む座敷童の少女。

ざしきわらし【座敷童子】

旧家の座敷に時折出現し、家の運勢の守護霊と考えられている童形の姿をした精霊。多くは、3〜[redacted]歳から1[redacted]歳くらいの髪をおかっぱにした[redacted]の姿といい、このワラシが人の眼につくうちは、その家は繁昌するが、外に出ていく姿を見たり、人の眼につかなくなると家が衰亡するという。／『日本民俗事典』

以下の書簡は、『伊奈澤家「ザシキワラシ監禁事件」報告書』に添付した参考資料である。編集ならびに解説の文責は私、鈴木蓉子が負っている。

伊奈澤家による監禁事件（以下「伊事件」と略）はいくつかの点で、ほかの「福神争議」と異なる特徴を示している。私たち妖怪が人間の心理と社会を理解するうえで、考慮すべき事例である。本資料は関係者のプライヴァシーに抵触しているが、その教育価値を鑑みて採りあげた。もちろん部外秘であり、取りあつかいには充分な注意が必要である。

資料の提示に先立ち、伊事件について簡略にまとめる。事件は大正×年7月×日、北方管領への匿名通報によって発覚した。鎮守府審神機構は7月×日付けで私、一等官の鈴木蓉子を派遣。私は翌3月×日に審神判定し、第9条第3項を適用して結審させた。

I県伊奈村の庄屋、伊奈澤家が宮城門のザシキワラシ族、忍を拉致監禁した。伊奈澤家は福神である忍の力を用いて、巨万の富を築いた。一般的に「富の道具」とされたワラシは劣悪な環境におかれるが、忍は例外だった。

伊事件では人間とワラシ、すなわち加害者と被害者の力関係が逆転していた。伊奈澤家の面々は、忍に絶対の服従を誓っていたのだ。

このように特殊な関係が生じたのは、人間心理における罪悪感のせいと考えられる。

第一に、T地方の人間にとってザシキワラシを監禁するのは禁忌であり、心理的負担を覚えずにはいられない「悪業」だった。

第二に伊奈澤家の場合、忍を監禁するかどうかで内部対立があった。監禁を主張した伊

奈澤源二郎は、当時の頭首にして実兄である浩太郎の反対を押しきって実力行使に及んだのだが、病弱だった浩太郎はそれにショックを受けて死んでしまった。頭首の突然死は、源二郎派の面々にとって決して償えない負い目となった。

第三に、人間は金銭による支配を後ろめたく思いがちである。期せずして富豪となった伊奈澤家は、金銭という力を振るうさいの心構えがまったくできておらず、闇雲な拡大路線を取って心の傷口を広げた。

伊奈澤家の面々は、これらの罪悪感を忘れるため忍に服従した。自分たちの立場を必要以上に貶め、ワラシサマのそれを必要以上に持ちあげた。人間にとって、「何かに尽くしている」という状態は罪悪感を消すのに役立つらしい。そして人間は、心の苦しみから逃れるためなら自らの肉体を傷つけ、生命を危うくするようなことまで行うのである。

よって私、人間と妖怪のあいだに生じた揉め事の調停者は、まず人間側の救出、なかでも差しせまった危地にある者の待遇改善を目指した。

伊奈澤家においてもっとも悲惨な境遇にあったのは、伊奈澤聡美、先代頭首の娘だった。

聡美はワラシ付きの使用人に選ばれ、ほかの誰よりも忍の命令を受けた。忍の暴君ぶりはエスカレートして、聡美にSMプレイを強要するまでになった（注：これには兵庫門のヌラリヒョン族、菱井春兵衛の暗躍が絡んでいる。報告書の第2章第3節を参照）。

見た目いたいけなカリギュラは友人の妖怪たちとともに、聡美を「マゾ奴隷」に仕立てあげたのである。

以下の書簡は、聡美が調教者たちに送った招待状である。文面を読めば、彼女がどれほど過酷な境遇にいたのか理解できるはずだ。

彼女は幸か不幸か、類稀なる美貌の持ち主で、S役にとって責めがいのある女性だった。殊に翳りのある表情、羞恥に耐える涙目と屈辱ゆえに引きむすばれた唇とは、同性の私でも見惚れるほど美しかった。また、スリムな九頭身体型なのに胸部と臀部だけは豊満で、そのアンバランスさは女性に生まれた哀しみのようなものさえ漂わせていた。

要するに、天性のマゾ奴隷役だった。

第一の書簡は広島門のアカナメ族、赤沼エリスに宛てられたものである。赤沼エリス、当時の人型甲羅は19歳だ。いちはやくアメリカかぶれになり、ショートカットとブルージーンズの上下で通していた。現在は赤沼一家の「姐サン」として門を仕切り、「黒衣の女王」と畏れられているエリスだが、当時は各地を遊学中の身で、かなり爛れた性生活を送っていた。

■書簡一、赤沼エリス宛て

拝啓　寒冷ひとしおの折、

エリスさまにおかれましては、益々ご盛栄のことと存じます。突然ながら筆を執らせていただきましたのは、エリスさまにぜひ、当家の忘年会にご参加いただきたいと思ったからです。わたしの主人である忍さまは、エリスさまの性技を殊のほか評価されて、その責めに痴れくるうわたしをご覧になりたい、と熱望されています。

もちろん、わたしもエリスさまに施していただいた調教を忘れられません。エリスさまの長い舌、人間ではありえないヘビのようなそれに舐られること想像するだけで、卑しい牝の股間はしとどに濡れそぼります。

先月のプレイを覚えていらっしゃるでしょうか。

エリスさまはメイド服を脱ごうとしたわたしを制されて、「今日は肌ァ、サラさんでもエエよ」とおっしゃられました。わたしを真っ赤な敷布のうえに座らせて、その隣に座られました。ブルージーンズ姿がとても映えておられたのを、昨日のことのように思いだせます。

わたしのあごをつかみ、横を向かせられました。そして服を着たままでも剥きだしの穴、わたしの口を犯してくださったのでした。

「聡っちにディープキスっちゅうもんを仕込んだるけえ」

そうおっしゃって、欲しがりな唇に本場の接吻を施してくださいましたね。

エリスさまは唇を舐りつくしてから、口のなか、とくに舌を愛撫してくださいました。アカナメ族の皆さまの舌は味蕾が大きく、またその蕾から粘液を染みださせておられます。わたしはザラザラとヌメヌメ、相反する刺激を同時に味わわせていただきました。エリスさまはさらに、ご自身の長さを用いた舌技を披露してくださいましたね。

思いだすだけで、ああ、腰が震えます。

わたしは舌腹どうしを思いきり擦りあわせられて、粘膜の凄みを知りました。舌の付け根をえぐられて、口がもっとも原始的な快楽の出所だと知らされました。欧羅巴人が言うのとちがい、接吻は粘膜と粘膜をもつれあわせる動物的なものなのですね。エリスさまの舌で粘膜を舐めあげられるたび、わたしは顔そのものが溶けていくような心地に襲われました。

アカナメ族独特の唾液もまた、わたしの眉間を熱くしてくれました。それは耐えがたい掻痒感をもたらして、愛撫を求めずには居られなくするのです。たっぷり塗りつけられたあとで擦りたてられると、わたしは甘痒さのあまり気死しそうになりました。

「……ウフフフ。聡っちはホンマ、いやらしいコやねえ。キスだけでこないなカオ見せる好きモン、ウチ初めて見たわ」

「そ、そんな……わたしは、好きモノなどでは……」

「ほれ、鏡を見てみい。耳まで真っ赤にして……お姫さんみたいな吊り目もトローンと垂らして……」

「言わないで……ください……」

「……唇も真っ赤に膨らませて……まるでアソコの花びらじゃね。犯されたがりの聡っちは、股ぐらで咥えるだけじゃ足りんけえ、カオにもオ×コを用意したんじゃ……忍っちもそう思うじゃろ？」

忍さまも頷かれました。そして「おま×こ顔と言われるのはいやなのか？」と尋ねてこられました。

えっちシーン試し読み ここからスタート！

「……いいえ、いやではありません」

忍さまが頷かれたのですから、ただ認めるだけでは足りません。

「エリスさまのおっしゃられる通りです……さ、聡美はいやらしい牝ですから、この口も……せ、性器のようなものです……」

「オ×コのような、じゃのうて、オ×コそのものなんよ」

「は、はい。聡美の口は……性器です」

「じゃけえ、こっちもブッスリいっとかんと寂しいやねえ……」

エリスさまはわたしの顔をガッチリつかむと再び、舌を突きさされました。二人分の涎に濡れた唇を肉食性の動きで割りひらき、二人分の涎が溜まっていた口内を徹底的に舐めまわされました。口蓋や唇の裏、さらには歯茎まで愛していただいて、わたしは陶然とさせられました。たぶん、正座のまま爪先を痙攣させていたはずです。上あごの粘膜があれほ

どの性感帯だとは思いもよりませんでした。

「……最初は苦しいかもしらんけど、聡っちならダイジョウブじゃ。すぐに馴れて、イキ倒すようになるけえ」

エリスさまは両頬を挟む手に力を込められると、粘膜のヘビを口の奥めがけて伸ばしてこられました。舌表を擦られて艶めいたわたしは直後、全身を硬直させました。エリスさまの舌は口蓋垂を暖簾のように除けられて、喉に区切られる所まで達されたのです。

「……うむっ、むう！　むむむっ！」

突然の暴力的な責めに、わたしは目を白黒させました。このときはまだ、エリスさまが与えてくださった真の悦び、苦痛の果てに広がる牝奴隷の花園が見えていなかったのです。わたしは喉を撫でまわされ、涙を浮かべて悶えました。エリスさまは虹彩のない目を輝かせて、さらに舌を刺しこまれました。

「むーっ！」

喉の粘膜をゾリッと擦られて、わたしはたまらず呻きました。飲食物の通り道として常日ごろ刺激されているとはいえ、陵辱の意志を受けいれたのは初めてでした。

エリスさまはわたしの苦悶に構わず、舌をくねらせて奥の奥まで進まれましたね。わたしは喉を削られ、舌を押しつぶされました。口いっぱいに頬張らされたせいで、あごが外れそうになりました。首筋から肩にかけての筋肉を限界以上に緊張させられて、わたしはメイド服のフリルに衣擦れの音を立てさせました。

「むむ、うむむ……あむっ、むむむ……」

口いっぱいはすぐ「喉いっぱい」になり、狭い洞窟をむりやり広げられました。エリスさまの舌は首のなかほど、男性の身体で言えば喉仏のあたりまで潜られたと思います。筒と中身、肉の刀と鞘が密着するたび、わたしは粘膜の奏でる粘音を飲みこみました。まったく角がないのにエグくて、下腹部の底に染みこむ音でした。

さらに二人分の涎もダラダラ、と垂れてきました。粘度と効果のちがう粘液は喉を撫で、

胃のかたちを意識させました。わたしはアカナメ族の痒み成分に犯されて、お腹のなかを掻きむしりたくなりました。

「……ほれ、やっぱり聡っちには素質があるんよ！　オ×コからエエ匂い漂ってきよった」

わたしは否定しようと首を振りかけて、舌の杭に止められました。口蓋垂を弾かれて、ぶざまな悲鳴をあげました。エリスさまは往生際の悪いわたしに引導を渡されるべく、メイド服のスカートを捲りあげてくださいましたね。わたしは真っ赤なショーツの濡れぶりと匂いを突きつけられて、目尻を潤ませるしかありませんでした。

「ハァ……これじゃよ、これ。この……甘いんじゃけどどこか哀しい匂い……散るまぎわのカタクリみたいなンを嗅いでもうたら、ハァ、ほかのニンゲンの肌なんて、もう舐める気になれんよ」

エリスさまは何度も鼻を鳴らされて、

「聡っち、遠慮せんでエエ。ウチのまえでうったらばったらするのは禁止じゃ。ドーンと

イッたれ！」

長くて、太くて、男性器そっくりのそれを抜き差しされました。

「……むむむ、むーっ！　……むぐ、ぐぅ……うむ、むむむ……むふぁっ！　ふああ！　ああっ、き、気持ちいい……気持ち……あむむ！　むむっ、むーっ！」

エリスさまの舌はわたしが呼吸できなくなる深さまで潜られ、生命の危機を味わわせてからゆっくり戻られました。

いわば首筋にカミソリを突きつけた瞬後、このうえない優しさで撫でられるのです。緊張のあとに訪れる愛撫。独特の触感と絶妙の力加減との掛けあわせはまさに、神経を狂わす麻薬でした。

わたしは咽びなきました。白黒させている目から大粒の涙を垂らしました。痛いからではありません。外から見ている分にはただの虐待にしか思えないでしょうが、私は確かに快楽を覚えていました。

基本的には息苦しいので、頭がぼうっとしてきます。そのぶん、理性や自制心が引っこみます。やがてうっすらと暗くなった視界の端々に、淡い光がちらつき始めます。それを見ていると、自分がここまで犯されている、という被虐感に満たされるのです。

喉の奥深く、ふつうならまず触れられない秘地まで嬲っていただけている。

息苦しさ、食道の痛痒、粘膜の心地よさ。目の奥を沸騰させそうな刺激が一本の芯となって、全身を貫きます。わたしのようにいやらしい牝は、あそこに穴が開いているうえにいやらしいことばかり考えているので魂の背筋を伸ばせないのですが、エリスさまの責めはその釘、補強材になってくれるのです。

この被虐感が「わたし」だ。

心のなかでのさばっていたものが集められ、身体の応えも単純になりました。唇から涎をあふれさせて喉まで濡らし、舌の抜き差しに半瞬遅れて目と顔の色を変えました。わたしは泣きながら悦び、悦びながら悶えました。天国と地獄を行き来して、ぶざまな百面相を

視姦していただいたのでした。

エリスさまの赤みがかった目が、獲物をまえにしたヘビのように煌きました。「この牝奴隷め」。

「……むーっ！」

視線が最後の一押しでした。わたしはかつてない絶頂、苦しみの果てに見える悦びを教えられました。牝にしかたどり着けない楽園で、わたしは全身のありとあらゆる穴を開きました。女性器も唇のように割れて、何かを訴えていました。

「むむっ、うむむ！　むむむっ！」

でも、それに耳を傾けている余裕はありません。わたしは瞠いた目から涙を、震える口から涎を、毛穴という毛穴から汗を噴きだして、絶頂に酔いました。両手の指先で見えないダイヤルを回し、両足の爪先を負け犬のように丸めて震わせました。

「むあ、あ……ふあああ……」

エリスさまが舌を抜いてくださったときには、息も絶え絶えでした。メイド服の襟や袖は汗に濡れて変色し、コンチネンタル＝タイは涎にまみれて濡れ雑巾になっていました。剥きだしの股間からは、自分でも恥ずかしくなるほどの匂いが漏れていました。

「……ほれ、イケたじゃろ？　聡っちは虐められれば虐められるほど感じるんじゃよ」

「……ふあ、ふああ……ああ……は、はい……はぁ、はぁ、はぁ……わたしは……い、虐められるほど……」

「聡っちにとって、コレはお仕置きじゃけぇね！　ウチにとっては……」

エリスさまはわたしの左足首をつかまれると、力まかせに持ちあげられました。わたしを真っ赤な布団のうえに倒し、グショ濡れの陰部を白熱電球のもとに引きだされました。

「ふあっ？　ああっ」

わたしが行動するより先に、左足を肩に乗せ、右足の脛に跨られましたね。わたしの股間をほぼ九〇度に開くと、唾液にまみれた舌をショーツの足刳りから差しこまれました。

「……お食事じゃ！」

エリスさまは股布の裏地を舐めて、恥蜜を吸いとられました。ジュルジュルという粘音は、わたしの羞恥心を破壊するのに充分でした。やがて申し訳程度の覆いを除け、地に落ちたアケビのような裂け目を露にされました。

股間の唇は、橙色の明かりに照らされて果肉みたいに光っていました。だらしなく緩んだ割れ目は、内なる襞のヒクつきを垣間見せて、わたしの欲深さを伝えました。エリスさまはご馳走をまえにした子どもの笑顔を浮かべて、

「あーっ！」

わたしを貫かれました。ディープキスのときよりも短兵急に、奥まで潜られました。

「だめえっ、まださっきのが終わってない！　イッてる感じが退いてないのぉ！」

「わかっとるよ。じゃけえ、刺したんじゃ」

「そんな……あああ、ああ！」

わたしは口でイッたばかりで、子宮をずいぶん下ろしていました。すぐに入り口をノックされ、荒々しく蹴破られました。粘膜性の肉筒に子宮孔を押しまげられるのは、経験者にしかわからない快楽です。わたしはひとたまりもなく突きあげられ、牝の境地に運ばれました。

「い、イクッ！　聡美イクウッ！」

それは始まりでしかありませんでした。エリスさまはそのまま舌を伸ばされて、子宮孔を刮ぎ続けられました。わたしは身を起こそうとして背筋と腰裏に裏切られ、後頭部を布団に叩きつけました。腰からしたは勝手に震え、特に内腿は生き物のようにビクビクと暴れ

ていました。

「あーっ、あーっ！　聡美ぃ、また！　あああ、すぐに！　あっ、もう？　もうなのぉ！」

全身から汗が噴きだして、それまでがお遊びだったと言わんばかりに匂い始めました。わたしは敷布を握りしめ、断末魔を刻みこんで皺だらけに変えました。

それでもまだ、わたしはアカナメ族の妙技を味わい尽くしてはいなかったのでした。エリスさまの舌は膨張した子宮に入りこみ、逆さになった洋ナシの底を小突きまわされました。

「……あおお！　おおお！」

まさに奥の奥、女体のもっとも秘蔵されている部分を舐られたのです。舌はザラつきながらもヌメらかで、痒みと和みの相反する刺激を同時に擦りこんでこられました。さらに囚われた魚のように動きまわり、人間相手では絶対に刺激されない壁を一毫の隙間もなく嬲ってくださったのです。

「おおっ、おーっ！　さ、聡美イクッ！　イク、イクゥッ！」

「どこじゃ、聡っち？　どこがキモチよくなっとるんじゃ？」

「お、奥ぅ！　奥がぁ……」

そこまで言いかけて、わたしは自分の勘違いに気づかされました。絶頂の波は、子宮以外の場所からもやってきたのです。

エリスさまの舌腹が子宮孔に密着して、舌先の暴れぶりを伝えていたのです。さらに小刻みな抽送をくり返し、膜状のそれを内に、外に、と弾かれました。耳ではなく粘膜で屈曲音を聞くたび、わたしは瞼の裏に光の波を見せられたのでした。

「……ああ、ちがう……お、奥の中もぉ……ま、まって、なかのなかも……」

まだ終わりではありません。長い舌は当然、わたしの膣腔にも触れていました。エリスさまはギチギチの締めつけをモノともされず、S字を描かれたり、縦に波打たれたりして、

わたしの秘粘膜を掻きまわされました。

「奥じゃ、なかじゃ……フフ、いったいどこなんじゃ」

「だからぁ、あそこの……」

「アソコぉ？」

「……お、オ×コのなかの……なっ、なかの、奥のぉ……おあっ？　あーっ！」

「ウフフ、フフフ！　聡っちはホンマ、虐めがいのあるコじゃねえ」

エリスさまの舌が行きどまりの壁ごと、わたしそのものを揺すぶられます。下腹部は子宮の身悶えを映しだして浮き沈みをくり返し、内腿は爪先の痙攣を拾って、やはり腱を浮き沈みさせます。

「おかしくなる！　こんなにされたら、狂っちゃう！」

「ほれ、ドリル責めじゃ。聡っち、これ大好きじゃろ？」

「……イクウゥッ！」

舌が襞を巻きこみながら、時計まわりに回転しました。わたしはなかの血管を捩られ、神経を縺れあわされました。

「くひぃっ、それイクッ！　さ、聡美イッちゃう！」

胴の底あたりで大きな電球が瞬き、まるでレントゲン写真を取られたみたいに身体の隅々まで感光させられました。白く冴え冴えとした光は、背骨をネットリと舐めあげて額から抜けていったのです。うなじのあたりを通過されるときがいちばんたまらなくて、わたしは手負いの獣みたいにもんどり打っていました。

「……おー、エエおツユ飛びだしてきた！」

そのつど膣壁を締めて、エリスさまのモノを抱きしめました。わたしの秘所は即席の水鉄砲と化して、羞恥の証を噴きだしました。

「あーっ、出ちゃう！　聡美っ、出ちゃうの止められないのぉっ！」

陰唇を突きやぶられて溜まっていたものを吐きだすのは、狂おしすぎる快楽でした。腰からしたが丸ごと抜けてしまうのでは、と思いました。わたしは何度も何度も、

「イクッ！　イクッ！　イクッ！　……イックウゥッ！」

女に生まれたことを感謝させていただきました。喉と膣、上下の口をここまで愛していただけた牝は、そういないと思います。

ありがとうございました。

あれ以来、喉を犯される感覚を忘れられません。うどんなどの麺類を食べるとき、つい妖しい気分になってしまいます。もちろん、子宮のなかを舐めまわされる絶頂感については

言うまでもありません。

もしエリスさまもお忘れになられていらっしゃらないのでしたら、あの苦悦をもう一度味わわせていただけないでしょうか。わたしは誠心誠意、牝の義務を果たさせていただきます。

伊奈澤家まで御足労いただきますようなにとぞお願いいたします。

大正×年一二月×日　伊奈澤聡美

赤沼エリスさま

付記：最近、聡美は新しい肉芸を修めました。ご披露させていただきたいと思います。

鈴木蓉子、編集ならびに解説者である。

かなり衝撃的な書簡だったと思う。もちろん、これは聡美の本心ではない。ただ少なからずの真実も含まれているため、この文面だけで虚実を読み解くのは難しい。ヒントにな

るのは以下の記述、

＞忍さまが頷かれたのですから、ただ認めるだけでは足りません。

＞聡っちにとって、コレはお仕置きじゃもんね！

などである。聡美が忍の目を意識していることがわかる。冒頭の誘い文句も、要するに「忍の希望を満たすために来訪せよ」という意味だ。聡美は自らの性的な満足について記しながら、実際には忍の欲望ばかり考えている。第二の書簡は、この点をより伝えている。大阪門のワニュウドウ族、黒太郎に宛てられたものである。

黒太郎、当時の人型甲羅は45歳である。人間女性を性的に玩弄するのが生きがいの違約妖怪で、なかんずく焦らし責めや絶頂漬けといった極限状況を好んでいた。現在、鎮守府中央第13監獄において服役中であるが、いったい何人の女性を追いこみ、その魂から精を搾りだしていたのか、さらに余罪が追求されている。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/